『まんじ』88号(2003.5)

崔致遠の碑文

新井　宏

良港にはかならず島と山がある。釜山は島と山に取り囲まれた超過密都市である。その西側には、金井山から九徳山まで断続する南北の山脈が連なり、洛東江が釜山に流れ込むのを峻拒している。標高七百メートルにも満たない山々ばかりであるが、岩山なので天然の要害である。一方、東側にも機帳から萇山に続く南北の山なみがあり、そのふたつの山脈にはさまれ細長く広がっているのが釜山の市街地である。

しかもその市街地にも、島のような小山が散在しているので、平坦な土地はほとんどない。だから四周の山々の中腹まで超高層アパート群が立ち並ぶことになる。

そんな釜山を地図も持たずに、一日中歩き回ることがある。北の東莱から南の釜山港まで歩いても三時間くらいしかかからないから、市街地はもうあらかた歩き尽くしてしまった。残るのはふたつの山脈の外側に広がる広域市街地である。

海雲台は釜山の中心地から東部にやや離れた萇山の南海岸にある名勝地である。昨年末のある日、思い立って釜山の海岸線を歩いて見ようと、いつものように東莱のバスターミナルから歩き始めた。鉄道が見え隠れする幹線道路を二時間あまり歩くと海雲台に着く。韓国の鉄道は完全に時代から取り残されていて、めったに列車は通らない。鉄道輸送を増強する前に、いきなり自動車社会に突入してしまったからである。

かっての海雲台は海辺特有の飲食店街が雑然と立ち並び、その周りに屋台がひしめいていたように記憶しているが、今は完全に再開発され、周辺には大型の観光ホテルが林立している。ワールドカップに向けて整備したのであろうか、道路も広く、屋台等はテント村に集約されていて、国際観光地の風情である。

その海岸のはずれに、チョ・ヨンビルが「釜山港へ帰れ」の中で、

花咲く冬柏島に春は来たれど
兄弟が発った釜山港には
かもめだけが悲しく鳴いている

と唄った冬柏島がある。もとは独立した島であったが、今は陸続きになっていて、その頂上に統一新羅末期の大学者崔致遠の銅像が建ち、周辺には彼の事績や漢詩が刻まれている。

わが畏友、漢詩人の鯨游海氏との酒肴にでもなればと思い、漢詩を読むがやはり歯が立たない。しかし事績についてはハングルなので何とか判る。

それによれば、崔致遠は十三歳で唐に入り、十八歳で科挙に合格、詩人として名を挙げ、役人として出世し、黄巣の乱では「討黄巣檄文」を書いて大功を挙げたという。まるで阿部仲麻呂のような経歴であるが、異なるのは二十九歳の時、故郷に錦を飾り、新羅の王朝に仕えたことである。

しかし当時の新羅は既に朽ち落ちる寸前であった。彼の意見に耳を傾けなかったばかりでなく、迫害さえ加えるありさまで、彼は結局すべてに絶望して伽耶山海印寺に引きこもってしまったという。

冬柏島に崔致遠の銅像が残るのは、彼が伽耶山に入る途中、ここを通り風景の美しさに感動して、島の南端の岩に「海雲」と刻んだとのいわれによる。海雲は崔致遠の号のひとつである。

崔致遠の事績を読んでいる内に思った。菅原道真と全く同時代に生きているし、阿部仲麻呂よりも百年ほど後の人物であるが、経歴が実に良く似ている。これは『まんじ』のテーマになりそうだ。さっそく大学の図書館で調べてみようと。

それが私の研究に大幸運をもたらすことになった。崔致遠の記した「崇福寺碑文」に出会ったのである。そこには、大変なことが書かれていた。

……ついている……ついている……本当についている……。

人生にはつきがある。そしてつきを意識するとまた次のつきを呼びこむ。崔致遠の崇福寺碑文に出会ったのも、そのつきの連鎖の一環にちがいない。

思うに、今度のつきの連鎖を辿って行くと、どうもすべてが初めての韓国旅行に行き着くようである。

妻と初めて韓国を訪れたのはもう十年以上も前になる。五十代半ばのサラリーマンしては最多忙な時期に、やっとの想いで纏め上げた「古韓尺」の研究結果が、幸運にも吉川弘文館から出版されることになった。それを機会に、文献だけで知る韓国の遺跡、特に慶州の皇龍寺址は

ぜひ見ておきたかった。五月の連休を利用してのあわただしいツアー旅行、たしかひとり当たり二十万円以上かかったように記憶している。今思えば随分割高な旅行であったが、それが私たちで一緒に出かける初めての海外旅行であった。

世の中には不思議なことがたくさんある。この韓国旅行がそうであった。わずか六日間の日程に過ぎなかったのに、その時の出会いが古韓尺の研究にいつも不思議に絡んでくる。この海雲台の崔致遠もそうであった。とにかくすべての出来事が不思議な糸で結ばれ、私の研究を後押ししてくれている。

私は永年にわたって、古代の朝鮮半島と日本に共通する古韓尺と名づける二十六・七センチの尺度が存在していたことを主張し続けている。研究論文も多数書き、その結果を研究書として出版もしている。その結果、一部の学者には積極的に認められ、韓国ではその本の海賊版が出ているほどであるが、世の中の常で従来学説とぶつかるところもあるため、無視し続けている学者も多い。それは、私の学説が主として考古学的な遺構とか遺物などの間接的な状況証拠に依存していて、古文献の裏づけなど直接的な証拠に乏しいためでもある。

……決定的な証拠がない限り、従来学説に忠実にしていれば間違いはない……第一いままでに従来学説に則って多くの論文を書いてしまっている……アマチュアの学説にうっかり乗っかって笑いものになったら大変だ……。そんな蔭の声が聞えて来るようであった。

なんとか古韓尺の決定的な認証を得たい。そのための作戦はふたつあった。ひとつは、発掘資料や文献の探索である。これで決定的な証拠が見つかればまったく文句ない。しかしそれほど甘くはないのも十分に承知していた。次善の策はアマとしての発言からプロとしての発言に切り換え、専門家入りすることだ。そのためには大学教授という肩書が好都合だ。さいわい金属工学では多少の勲章もある。これを利用しない手はない。

その結果、歴史と考古学の研究を優先して良いという恵まれた条件で、いま韓国の国立慶尚大学にいる。所属は金属工学科、しかし名刺には工学部とは書かない。

そして二年が経過した今日、崔致遠の崇福寺碑文に出会ったお蔭で当初の目的を二百パーセント達成した気分でいる。とにかくついていた。いやつき過ぎていた。出るはずのない牌を次々に引いてきて連続して九連宝灯で上がった気分である。

それがすべて最初の韓国旅行と関連しているように思えるのである。こんな具合である。

初めての韓国旅行、第一日目は公州や扶余の観光拠点

となる儒城温泉に泊った。韓国最大のこの温泉地は、その翌年に開かれる大田科学万博の工事で殺気立っていて、道路を渡るにも決死の思いであった。あちらこちらにまだ貧しい家々が残っていたが、それを飲み込むかのように、すべてが激しく変貌していた。

そんな雑踏をさけながら、朝早く妻と散歩をしている内に、たまたま大学らしいところに行き当たった。それが百済文化研究の名門、国立忠南大学であった。もちろん大学の名前はよく知っていたが、宿のすぐ近くにあることなどまったく予期せぬことであった。

……ああ、きっとこの大学に何か縁がある……

そんなぼんやりとした予感がその後に次々と実現して行く。

まず忠南大学の百済研究所から古代製鉄技術についての講演の依頼が舞い込んできた。それは、韓国での生活を始めてから一年ほどたった一昨年末のことであった。会社を卒業してから書き始めた金属考古学関係の論文が目に留まったらしい。私の講演のために、一日の日程を準備してくれるという。

韓国の考古学や古代史の関係者と知り合う絶好な機会である。講演時間も十分にある。それならば古韓尺の研究についてもぜひ紹介したいと申し出たところ快く受入れてくれた。

講演企画者は私をたんに金属考古学の研究者としか知らなかったようであるが、講演会場には、古韓尺の研究を通じて知り合った関係者が多数やってきていた。その関係で、今度は古代計量史についての講演会や討論会等にも誘われるようになり、忠南大学の百済研究所との繋がりが深まって行く。そして昨年夏には論文「〈三国史記・遺事〉記事による新羅王京の復元と古韓尺」を『百済研究』に載せてもらうことになった。

この論文が古韓尺研究の決定打になるだろうということは、私には良くわかっていた。とにかく十分過ぎるほどの手応えであった。これで永年の夢が百パーセント達成できる。それを『百済研究』に紹介できるのも、最初の韓国旅行の奇縁のように思える。

また、その論文の主舞台となった新羅王京すなわち慶州には第三日目に泊っている。奈良に似通う静かな古都で、その東側に念願の皇龍寺址がある。奈良東大寺をしのぐ巨大寺院で、その詳細な発掘調査結果が発表されたことによって、古韓尺説がどれほど強力な支持を得たか計り知れない。その皇龍寺址をぜひ見てみたいというのが、旅行の主目的であったが、もちろん観光コースには入っていない。

翌日の朝早くタクシーの運転手に皇龍寺址と告げて目的地に向かうが、場所が良く分からないらしい。世界的

に有名な遺跡でさえ、観光名所でもなければ現地の人々は関心がないのであろう。それでもなんとか地図を頼りに広大な発掘現場に辿り着いた時には、もう太陽が昇り九重塔址の礎石群が朝露で光り輝やいていた。あこがれの地を踏むことができたという思いで、金堂址、講堂址、回廊址、そして中門址とむやみに歩き回った記憶がある。

その皇龍寺址の発掘調査は今も続いていて、皇龍寺周辺の王京條坊の様子が次第に明らかにされ、従来から有力であった條坊百六十メートル方格説がますます確実なものになって来ている。この方格地割と『三国史記』や『三国遺事』の記事を対照すれば、一方格が百歩であることが明らかであり、そこから一歩は百六十センチすなわち一尺は二十六・七センチと計算される。ここに古韓尺が待望の文献資料によって裏付けられることになったのである。

かくして皇龍寺址訪問もその後の古韓尺の研究と奇縁で結ばれる。

そして第四日目には釜山に入り海雲台に泊った。宿の朝鮮ホテルはちょうど冬栢島の入口付近にあり、いつものように妻と朝の散歩で冬栢島の上まで登った。そこで出会ったのが、崔致遠の銅像である。

崔致遠といっても、その当時は名前を知っている程度で、特に関心があった訳ではない。ただ新羅の歴史に登場する大学者に、朝の散歩で出会えたのが嬉しく、妻との会話も弾んだ。そしてその思い出が私を再び海雲台に向かわせ、崔致遠の崇福寺碑文に巡り合うきっかけとなったのである。日韓の古代土地制度を読み解く貴重な記録を発見する端緒であった。

日本では大化前代に代制という土地制度が行われていた。しかし、その起源については高麗尺によるとする学説が有力ではあったものの、疑問点を提出している学者も多く、いわば良く分かっていない状態であった。それが崔致遠の崇福寺碑を解析することによって、代制と朝鮮半島の結負制が完全に同じシステムであると明らかになったのである。そして、その基礎に古韓尺があったのはいうまでもない。それは日本と朝鮮半島の土地制度が同時に解明された瞬間でもあった。

私はもともと「新羅王京」の論文を書けたことで十分に満足していた。そのことによって、古韓尺が状況証拠ばかりではなく、文献的にも裏付けられ、学説としての確固たる基盤を築くことができたからである。しかし、日本の代制と朝鮮半島の結負制が同じシステムにあったことが判明したことは、古韓尺の認知を求める立場を超えて、日本の古代史に大きな影響をもたらすはずである。大化の改新をめぐる歴史論争のひとつの焦点である代制

から町段歩制への移行についても、新たな観点からの論議を呼ぶことであろう。

私は古韓尺の研究を進めるためには、朝鮮半島の土地制度史の研究が不可欠だと考えてきた。しかし朝鮮半島の土地制度については、高麗末期から以降については、かなり詳細にわかっているが、高麗以前の制度については、むしろ日本よりも判っていなかった。

わかっていたことといえば、朝鮮半島では、土地の実面積を示す頃畝制と、同一収量を基準とする結負制が並行して行われており、新羅時代には結と頃の面積かほぼ同一であったことぐらいで、肝心の頃や結の実面積については諸説あるものの、まったく定見が得られていなかった。

それは、高麗時代の土地制度を記述した『高麗史』文宗量田法（一〇六九年）の記述に誤りがあり、その復元をめぐって諸説が提出されていたからである。

文宗量田法というのは、量田尺の三十三歩の方格すなわち千八十九平方歩を一結とする全く奇妙な制度であった。ただし、それが間違いでないことは、金石文の記録などから明らかにされていた。問題はそこに記載された量田尺がどんなものであったかである。そこにはこう書いてあった。

六寸為一分 十分為一尺 六尺為一歩

これをそのまま素直に読めば、基準尺の三十六尺が一歩になる。しかしそれではどんな基準尺を持ち出しても、一結の面積があまりにも広くなり過ぎて実状にあわない。

そのため多くの学者達は「十分為一尺」の、分か一か尺の部分に誤りがあると考えた。そうするといずれの場合でも結局は六尺で一歩になる。しかし六尺一歩なら通常の制度そのものであり注記を必要としないし、文章的にも冗長すぎる。その上、六尺一歩であれば、どんな基準尺を持ち出しても、同時代の宋人徐兢が、宣和五年(一一二三年)に書いた『宣和奉使高麗図経』の記録に合致しない。

そのような状況から、高麗中期の結の面積でさえ定見が得られず、ましてや新羅時代の面積については、議論を深めることができなかった。

ところが私には私だけが知っている貴重な情報があった。古韓尺の研究を通じてである。

頃畝制とは古代中国の制度で方百歩すなわち一萬平方歩を一頃とする制であった。これを古韓尺で計算すると二万五千七百平米になる。一方、朝鮮時代前期の世宗代に定められた頃の面積も二万五千七百平米で完全に一致するのである。しかも古韓尺の百歩を方格とする古代地割遺構は新羅王京をはじめとして、南原小京や尚州邑城にも残っているし、文献的にも方百歩をもって頃あるい

は結と伝える事例がいくつもある。だから朝鮮半島では頃の面積は長い間変わらなかったのである。

この事実を知ると、見えるものが変わってくる。文宗量田法の錯誤は「十分為一尺」の部分ではなく最初の部分の「六寸為一分」にあったのではないか。そう気づけばあとは一本道である。六の部分が二、三、四、五のいずれかの誤りであったとするならば、文章としての意味も十分に通る。

これを徐兢の記録に照らしてみれば、周尺を基準として

四寸為一分 十分為一尺 六尺為一歩

と読むのが最も合理的である。すなわち量田用の一歩は周尺の二十四尺になる。ところで周尺の八尺が一歩であるから、二十四尺は通常の歩で云えば三歩のことである。しかも周尺の一歩と古韓尺の一歩は実長が等しいから、文宗量田法を古韓尺の歩で示せば、三歩×三十三すなわち方九十九歩になる。何の事はない結は方百歩のことなのである。

しかしそれならばなぜ量田尺による方三十三歩などというややこしい制度を持ち出す必要があったのであろうか。この疑問を解く鍵が崔致遠の崇福寺碑文の中にあったのである。そこにはこのように書いてあった。

東俗 以五畝減百弓為結

これは、東俗（新羅）では方百弓すなわち一万平方歩の面積から五畝すなわち千二百平方歩の面積を差し引いたものが結であると解説した文章である。計算して見れば八千八百平方歩が結の面積になる。しかしこれは頃や結の面積を方百歩すなわち一万平方歩としていたことと異なるではないか。結と頃の面積が等しかったとする定説に誤りがあるのであろうか。

そこで重大なことに気がついた。もともとは、結は頃と同じ一万平方歩ではなく、九千平方歩すなわち〇・九頃だったのではないか。なぜならば、面積の里は九頃であり、十結が一里であったとすれば、結が〇・九頃と簡単に導き出せるからである。もともとは結と頃は異なった単位だったのではないか。

そう気がつくとすべてが見えてきた。三国時代に、百済では結負制が行われ、新羅では頃畝制が行われていたのではないか。結は百負、一負は十束であるから、基本単位の束は九平方歩すなわち方三歩になる。だからこそ、三歩を量田歩にすればその一平方歩が束であり計算が容易になる。ここになぜ三歩を量田歩とする奇妙な制度が始まった理由があるに違いない。

しかも統一新羅の時代になると、当然のこととして、新羅、百済、高句麗の土地制度がバラバラであっては不便である。そこで結を頃に合わせてしまったのではないか。そうであれば、方三十三歩すなわち千八十九平方歩を一結とする制度がなぜ始まったかについても明快な説

明を与えることができる。

すべてがひとつに収斂した。美的とも云うべき結果である。煩わしいのでいちいち示さなかったが、この分野の研究者達を納得させるための傍証も豊富にある。心が躍る。これで高麗時代以前の土地制度研究が大きく進展するし、古韓尺も万全になる。

しかし本当に喜ぶのはその後の結論を導いた時であった。百済の結負制の面積を計算してみると、その一結は二万三千百平米であり、一束は二十三・一平米である。一方、大化前代に日本で行われていた代制ではその五百束代が後の一町歩であり、そこから一束代を計算すれば、二十三・一平米になるではないか。日本と朝鮮半島の土地基本単位が名称も面積も完全に一致している。しかも束の下位単位の把も共通である。こんなことが偶然に起こるはずがない。日本の代制は百済の結負制に源があるに違いない。

今までの学者達は代制の起源を高麗尺に求めていた。しかし実際は古韓尺による結負制に起源があった。

……勝った、勝った、勝った……完勝だ……。

古韓尺のライバル高麗尺については、多くの研究者達がその存在を前提にして数多くの論文を書いている。しかし厳密に言えば、その存在には極めて疑わしい点が多くある。そのことについては、古韓尺の存在を主張する過程でどうしても触れざるを得なかった。論拠は山ほどある。それは、かって高麗尺の根拠として引用されていた資料が、その後の研究の進展や発掘調査の結果によって、ほとんどすべて証拠能力を失ってしまったからである。例示して見よう。

① 高麗尺の起源とされていた東魏尺の長さが、「隋書」律歴志の記載の誤りであり、「宋書」にあるように約三十センチが正しいとされたこと

② 高麗尺の証拠とされていた四天王寺、皇龍寺、定林寺の柱間間隔がその後の発掘調査で、無意味なものになってしまったこと

③ したがって、高麗尺によって建てられたと確認される建築物が未だひとつもないこと(法隆寺のように、高麗尺の〇・七五尺を一支とする建物はあるが、その一支は古韓尺である)

④ 高麗尺の五尺一歩は、天平尺の六尺一歩と同長であり、高麗尺の実存を裏付ける理由にはならないこと

⑤ 尺度史の流れの中で見ると、高麗尺だけが異様に長いこと

だから現在では、高麗尺が実存したことを証する最大の証拠はむしろ代制の束代が高麗尺の六尺一歩の五平方歩に一致するということにあった。

それが代制の起源が百済の結負制にあり、その基本尺が古韓尺であったとなると、どうなるのであろうか。高麗尺説は完全に破綻するはずだ。

……みんなで渡れば怖くない……。

みんな高麗尺に乗っかって大合唱をしていた。誰かが、ある遺跡について高麗尺で設計されたと報告すると、詳細な検討もなく次の研究者はそれを引用する。みんなが引用するから、おそらく正しいのだろうと次の研究者もまた引用する。それに異を唱える者には冷笑を浴びせる。

誰かが言ったという。軍隊と研究は多数決がなじまないと。私も想う。研究は最も高尚な遊びだと。いうなればアルバイトをしながら、売れない小説や絵画を書いているようなところに研究の醍醐味がある。だから職業的な研究者は自戒すべきだ。本来は高尚な遊びなのだから、研究費も自弁すべきものなのに、給与さえ貰っていると。それがアマチュアの研究に冷笑を浴びせるとは何事かと。

いつか職業的な研究者に向かって、こんな文章を書いて見たいと思っていた。しかしよほど幸運に恵まれないかぎり、それが現実になるとは思ってもいなかった。とにかくついていた。

そして学んだ。とりとめもない偶然の出来事に心が弾む時、つきが生まれ、つきがつきを呼ぶことを。山歩きの知人に、成田空港でばったり出会ったりする。東欧旅行で一緒だった方を、ナイル河のクルーズ船上に見つけたりする。どうしても見つからなかった資料を、たまたま手にした本の裏表紙に発見したりする。そんな時には心が弾む。そして偶然の出来事を楽しんでいるとまた次の偶然がやってくる。それがつきだ。

崔致遠の崇福寺碑文がもたらした成果については、「結負制の復元と代制の起源」と題して一気に論文として書き上げた。いまそれを韓国語に翻訳している最中である。願望としては、日本と韓国で同時に発表したいが、プライオリティを優先する学術誌にあっては、それは許されまい。さあ、どうしようか。

いずれにしてもまた来週にでも釜山の海雲台を訪れてみよう。まだまだつきが続くような気がしている。これを逃してなるものか。